

神田日勝記念館

だよ



神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(01566)6-1555



馬 1965年

contents

2

第十一回無鑑祭
日勝の頭像、記念館に寄贈
世界の戦場から
桃井和馬の記念トーキー

超克の標
芸術鑑賞バスツアー

入館者、四十万人突破
「人と牛△寄託

「扇ヶ原展望」をめぐつて(常設展)
新世紀の顔・貌・KAO
第十二回馬耕忌

3

武藏野の作家たち
美術講座・作品解説公開制作

第五回 グループ環 油彩展
総画教室・子ども絵画教室

4

第十一回馬の絵作品展
審査講評

馬の絵学生会
齊藤 隆博

5

第十一回馬の絵作品展
審査講評

馬の絵学生会
齊藤 隆博

6

寄稿文「画風の真髓に
一貫した自己投影を見る」小室 吏

7

寄稿文「日勝の無い絵」 中村 聖司

8

「飯場の風景」の一筆箋新発売
記念館の学校活用
アート・キッズ・クリフ
夏休み子どもワークショップ
親子ワークショップ
感想ノートより

2004.11.20

21

第十一回蕪、墾祭

六月十七日 神田日勝記念館・鹿追町民ホール

神田日勝記念館の開館を記念する「蕪、墾祭」が、帯広の「すみれコーラス」を迎えて開催されました。



演奏は一部と三部が「故郷」「わすれな草」などの唱歌、二部ではピアニスト矢島道子さんのショパンの独奏があり、観客は、日勝の作品に囲まれて、女声コラスによる名曲に聴き入っていました。

引き続き会場を鹿追町民ホールに移し、恒例のワインとチーズを楽しみながら、交流を深めました。

また「超克の標」展のオープニングも兼ねて賑わいを見せしていました。



日勝の頭像、記念館に寄贈

六月十七日

幕別町在住の彫刻家・小室吏氏の制作した神田日勝の頭像が寄贈され、蕪、墾祭に合わせ、披露されました。

小室氏は帯広美術協会創立のメンバーとして日勝と知り合い、「記念館だより」への寄稿文依頼がきっかけとなり、日勝の頭像を寄贈されました。

「世界の戦場から」

四月二十四日～五月五日 鹿追町民ホール



イラク:豊田直巳



アフガニスタン:桃井和馬

「超克の標」展

六月十七日～二十七日 鹿追町民ホール

報道写真家達が結成した日本ビジタル・ジャーナリス

ト協会の写真集「世界の戦場から」の発刊を記念して開催された写真展の巡回展。

大石芳野、広河隆一、豊田直巳氏など十人による写真展で、百点が展示され、来場者の注目を集めました。

北海道出身の平野雅子さん、岡本淳子さんなど、幻想的なものや抽象的なもののオブジェなど個性的な作品が並びました。

展示

来場者は、それぞれの作家の作品を比較したりしながら、興味深く鑑賞していました。



芸術鑑賞バスツアー

NANMOSA 流政之展

十月十七日 北海道立近代美術館・夕張市美術館



芸術鑑賞バスツアー

NANMOSA 流政之展

十月十七日 北海道立近代美術館・夕張市美術館

十六名が参加し、札幌の北海道立近代美術館で開催中の「NANMOSA 流政之展」と夕張市美術館の市民文化祭の作品を鑑賞しました。

流政之は、長崎に生まれ、一九六三年に渡米後、国際的に活躍する彫刻家の秋を満喫しました。

札幌では彫刻の数々を堪能し、夕張では市民の美術作品を鑑賞し、芸術

本年度全道展協会賞を受賞した小笠原緑さんを始め、東京・銀座で個展を開催した作家を中心とした展覧会で、八作家の二十三点を展示しています。

北海道出身の平野雅子さん、岡本淳子さんなど、幻想的なものや抽象的なもののオブジェなど個性的な作品が並びました。来場者は、それぞれの作家の作品を比較したりしながら、興味深く鑑賞していました。



「人と牛A」寄託

六月十六日より公開

「人と牛A」が、神田日勝記念館に寄託され、六月十六日から展示されました。この作品は以前同社より寄託された経緯があり、再度の寄託となります。

なお、「人と牛」は原色による激しい筆触の作品群で、いずれも一九六八年の制作で、シリーズは四点が制作され、「B」は北海道立近代美術館に、「C」は神田日勝記念館がそれぞれ収蔵しています。

原色による激しい筆触の作品群で、いずれも一九六八年の制作です。



入館者、四十万人を突破

五月三日、旭川から来館

一九九三年六月の開館以来、十一年で入館者四十万人を達成。旭川市から来館した高倉暢子さんに、吉田弘志町長より記念品が贈られました。

高倉さんは、夫と友人夫婦との四人で道東旅行中に立ち寄り、「美術に興味があり、来てみたいと思っていました。四十万人目と聞いてびっくりです。」と幸運を喜んでいました。神田日勝記念館には今回初めての来館だそうです。



「新世紀の顔・貌・KAO」

四月二十七日～五月九日 神田日勝記念館

美術評論家中野中氏の企画による二十九名の著名な画家による自画像を集めた展覧会の巡回展。今年で第四回目になります。六号大の大きさの作品で、出品作家は、泉谷淑夫、佐々亮暁氏など。

来場者は、各作家の個性的な作品を見比べて、鑑賞していました。



神田日勝が依頼された帯広信用金庫のカレンダーの油彩画「扇ヶ原展望」(原画)を小テーマに常設展の展示替えを行いました。

扇ヶ原は然別湖に向かう国道沿いにある展望台で、十勝平原を望むパノラマのような風景が広がり、観光スポットにもなっています。

素描一点と油彩一点の外、一九六九年のカレンダーも展示されました。また、資料コーナーでは日勝が使用した釣り竿が初めて展示され、釣り好きであつた日勝が偲ばれます。



「扇ヶ原展望」をめぐつて(常設展)

五月十日～十一月十四日

第十二回馬耕忌

八月二十九日 鹿追町民ホール

十二回目を迎えた神田日勝の命日にちなんだ「馬耕忌」では、作家の村松友視氏による講演「嘘と本当のあいだ」が行われました。

村松氏は一九四〇年、東京生まれ。慶應大学文学部卒。出版社勤務時代に「私

プロレスの味方です」

で作家デビューし、「時代屋の女房」で第八

十七回直木賞を受賞

映画化されるなど、

話題になりました。

講演では、自身の生い立ちに触れ、家庭の事情で祖母に育てられたことをエピソードを交えて、ユーモラスに語り、約八十人の参加者は、熱心に聴き入っていました。

講演に引き続き、田中光俊氏のギター演奏や小檜山博館長との対談も行われました。講演に引き続き、田中光俊氏のギター演奏や小檜山博館長との対談も行われました。





円環する焰 池田良二



102年の闘争VI 木下晋



煙燐 水上泰財

武蔵野の作家たち ～武蔵野から北の大地へ～

八月七日～十六日 鹿追町民ホール

美術講座・作品解説 関連事業

八月八日・八月十一日 鹿追町民ホール

武蔵野美術大学で教鞭を執る七人の作品二十五点を一堂に集めた展覧会が開催されました。

出品作家は根室市出身の版画家池田良二氏をはじめ、水上泰財氏、木下晋氏、田子英長氏、久野和洋氏、柳沢紀子氏、樺山祐和氏。

木下氏は特異な細密描写による鉛筆画で鹿追でも数回展覧会を行い、また池田氏は北海道立帯広美術館に作品が収蔵されています。いずれも現代絵画の気鋭の作家で、極めて水準の高い作品群に来場者は、じつと食い入るように鑑賞していました。



水彩画公開制作 関連事業

八月十一日 鹿追町民ホール

武蔵野美術大学OBで、帯広美術研究所主宰による瀧川秀敏氏による水彩画の公開制作が行われました。瀧川氏は、鮮やかな筆さばきで短時間で作品を制作し、約四十人の参加者はその技術に見入っていました。



武蔵野美術大学の教授陣による関連事業が開催され、池田良二氏による美術講座と、久野和洋氏による作品解説が行われました。池田氏は自作をスライドで紹介しながら、自身の作風の変化について語り、久野氏は制作意図や作品の方などを自作を中心に説明し、来場者は真剣に聴き入っていました。



絵画教室・子ども絵画教室 関連事業

八月二十九日 鹿追町民ホール



「グループ環」展出品者による、一般と子どもを対象とした絵画教室が開催されました。一般向けとしては、町内の絵画グループの作品の合評会を行い、子ども向けとしては、水彩による静物画の指導が行われました。



美術公募団体の枠を超えた十三人の作家のグループ「環」の油彩展が開催されました。越沢満氏（道展会員）、橋本禮二氏（同）、斎藤洪人氏（全道展会員）、香取正人氏（新道展会員）など具象系の展覧会で、鹿追では第一回展に続き、五回展が巡回展として実施されたことになります。北海道の自然や風物を描いた作品が多く見受けられました。

”グループ環”油彩展 関連事業

八月二十九日～九月五日 鹿追町民ホール

第十回 馬の絵作品展

十月九日～十七日 鹿追町民ホール

- 募集期間：七月一日（木）～九月八日（水）
- 展覧会：十月九日（土）～十七日（日）
- 表彰式：十月十六日（土）会場 鹿追町民ホール

審査講評

審査委員長 齊藤 隆博



文部科学大臣賞



北海道知事賞



鹿追町長賞



北海道新聞社賞

第十回 馬の絵作品展 審査結果

（応募総数 1,557点）

●文部科学大臣賞

初山別村立初山別中学校2年 花房 翔哉

●北海道知事賞

札幌市立八軒西小学校5年 土山 俊樹

●北海道教育委員会教育長賞

芽室町立芽室小学校6年 萩原 初夏

●鹿追町長賞

初山別村立初山別中学校3年 宇野 美美

●鹿追町教育委員会教育長賞

鹿追町立鹿追中学校3年 三部 早希

●神田日勝記念館長賞

札幌市立星置中学校2年 高津 純里

●北海道新聞社賞

羽幌町立羽幌中学校3年 川森 琴未

●日本放送協会帯広放送局長賞

帯広市立帯広第一中学校1年 菅原 咲

●十勝造形サークル委員長賞

鹿追町立鹿追小学校1年 下坂 明彦

●帯広市教育研究会図工美術部会長賞

士幌町立新田小学校2年 鈴木 友也

●JR北海道社長賞

札幌市立東札幌小学校6年 佐々木大輔

●北海道電力帯広支店長賞

旭川市立日章小学校4年 佐藤 智香

●帯広信用金庫理事長賞

釧路市立湖畔小学校3年 太田 舜二

神田日勝記念館が開催する「馬の絵展」は十年目を迎えました。これまでにこの作品展を支えていただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

さて、今年も全国各地から一五〇〇点を超え

る作品が寄せられ記念の年にふさわしいものになりました。展示会場は馬と遊んだり、馬の世話をや、馬の親子の様子が描かれ、全体に優しく温かい雰囲気を醸し出しています。ここ数年は作品の質が向上し、積極的に馬と人との触れ合いを中心としたものが多くなりました。中でも文部科学大臣賞の花房君の作品は、骨太の馬を確かなデッサン力と繊細なタッチで表現した秀作です。この他にも、今回は構図や彩色がしっかりと多く、審査員一同入選作品を選ぶのに大変苦労いたしました。また、審査会場全体に溢れる感性豊かな作品群は審査員の胸を熱くするものがありました。馬を描くことによって動物の生き

方に触れ、その良さを学ぶことこの作品展のねらいですが、応募作品はこの十年間で一万点を超えるまでになりました。

昨年、神田日勝記念館は開館十周年を迎えた表作「室内風景」を展示しましたが、馬の絵展がきっかけで記念館へ多くの小・中学生の皆さんが来訪しました。この「馬の絵展」に出品する方が刺激となり、絵が好きでたまらない人がどんどん増え、自分の良さを発見し、個性を磨き、一層伸ばす場となればと願っています。

馬の絵写生会

七月十九日 ライディングパーク

関連事業



馬の絵作品の製作のため馬を見る機会の少ない児童生徒のため企画されたもので小・中学生活八人が参加。脇坂裕先生と眞鍋幸恵先生の指導で、実際に馬に乗ったり触れたりして馬を写生しました。

寄稿文

「画風の真髓に一貫した自己投影を観る」

小室 史

一九六三年 帯広美術協会創立展初日

東壁中央部に陳列してあつたと記憶しているが「板・足・頭」の大作前に坊主頭で作業衣にゴム長靴履き 赤褐色に雪焼けした顔の青年（日勝）が立ちじつと凝視していた この絵は板壁と板塀に挟まれた三人の頭部と足だけが描かれ 脊体は板塀で隠れ表情が見えない茶褐色の重厚なマチエールで描かれた前、横、後ろ向きの不動姿勢で立つ人体は特にデフォルメされ重厚感と迫力をを見せ 開闢に苦闘する凄まじい日勝の姿を見た思いで深く感動した作品であつた 又「飯場の風景」一連の絵を見るとき 私は戦後九歳のとき満州からの引揚者で 山積みの丸太に埋もれそうな極寒地の陸別に居住 父の勤める林業会社の貯木場にあつた宿舎（飯場）生活の頃を思い浮かべ鑑賞していた 冬期の貯木場は 木材の搬送作業に大勢の労務者で賑わい バチを打つ馬に激しくムチ打つ馬方や 蔦で丸太を巧みに扱う人たちの雄姿を見たり 板壁の粗末な飯場で赤々と燃えるドラム缶改造のストーブを囲み 威勢のよい酒盛りの唄と談笑が響き 出

稼ぎ人の喜怒哀楽が展開されるドラマの一喜一憂にヒューマニティな情景を見たものだ 同様に日勝さんも似たような体験が制作の背景となり発想の原点になったものと思う 岩松ダム建設等に携わった労働者 飯場で見た光景は自己の開拓生活に相似し 共感する生きざまや葛藤がヒューマニティに迫るリアリティな絵画を模索し ペインティングナイフの鋭いタッチで形を刻み描く技法を生み 逆遠近法の手法を駆使して視点を変えモチーフの内面を強調化し 実在感を高めた表現が あの迫力あるフォルムと重厚なマチエールの独創的写実絵画を創り出したものと思うのだ そして当時は現代絵画の動向を知る情報に乏しく 藤丸デパート裏小路の画廊喫茶ウイーンや居酒屋・味源に仲間が群がり アバンギャルド全盛の芸術論に終始し研鑽し合う唯一の場があつた ベニヤ板にベンキ、麻袋などの廃品や素材の活用法と工夫には一段と関心が高く 独特のマチエールで多様な画風を創り公募展で競い合つた 中でも帯広の革新派・寺島春雄が描く抽象画の色調や重厚なタッチ 立体的な



著者 略歴

S33、道学芸大創路校修了。
第1回道教美展特選、第9・10回日展入選。第2回日展彫刻新人選抜招待出品。豊頃開基百年記念像「飛翔」制作。道新文化「立体造形教室」専任講師。

デフォルムには学ぶものが多くの触発された このような田舎舞台で三十二歳の短い生涯に尽きた日勝さんは 過酷で特異な環境と苦境の中でも 様々な人と接触 交流を深め多様な情報を貪欲に吸収 酒醉させてヒューマニティの追求と制作に邁進し 一貫してどの絵に自分を投入させ「室内風景」に至るまでの十数年 開拓民の苦闘と激動に生きた自己の存在と主張をキャンバスに証したと思われる自己投影の独特な作風こそ 他に類を見ない特異な画風を構築し確立させ 芸術の真髓を發揮した偉大な画家であつた その秀作と偉業に 深く感服し感銘するばかりであり偲ばれる

寄稿文

「日勝の痛い絵」

中村 聖司

落ちたのか、おまえも。

神田日勝の絵が貸出先から帰ってきて、輸送中にくるんであった梱包材を開いた時である。一番外側の段ボール製の箱を開け、次にビニール製の緩衝材（エアー・キャップ）をはずし、さらに水をはじく茶紙（クラフト紙）をはずし、最後に画面にもつとも近いやわらかな中性紙（薄葉紙）をはずす。するとここなごなになつた赤や黄色の粒子や、木くずがぱらぱらと、白い薄葉紙の上に点在しているのだ。この作品の絵具もはがれ落ちてしまつたか。これが痛い。目の当たりにするのは、実に痛いのである。

現在、筆者の勤める北海道立近代美術館には、神田日勝の油彩画が十点収蔵されている。

百号から百五十一号の比較的大きな作品ばかりで、うち九点が板に直接描かれている。

この板がくせ者だ。一枚物の板ではなく継ぎ合わさ



岩井絵画修理工房による神田日勝〈牛〉の修復。
板の端目付近で剥落しそうな絵具を接着していく。

右からの力が加えられると、反りやゆがみが生じやすい。板がゆがむと、上にのつた絵具がはがれ落ちやすくなる。また、板は木の棟に釘で打ち付けてあるため、さびてしまつた釘が抜け落ちると、釘穴がささくれとなつて木くずや絵具が落ちてくる。

絵具がはがれた、剥落したといつても、画面を一目見てわかるほどではない場合もあるが、こうしたことの繰り返しが将来大きな損傷に通じるおそれは高いのである。

そのため美術館では、膨大な労力と経費をかけて温湿度を調整し、収蔵庫や展示室の環境を安定させようとする。作品を持ち運ぶ時も、注意しながらそろりそろりと運ぶ。

しかし展覧会にあたつて作品を貸し出したり借用したりする時には、どうしても温湿度の大きな変化や輸送にともなう振動が生じる。こうしたことによる傷みの進行にできるだけストップをかけるために、修復が行われることがある。こうなると絵画修復の専門家に登場してもららう。

著者略歴
函館市生まれ。北海道立近代美術館、北海道立旭川美術館学芸員を経て、現在北海道立近代美術館主任学芸員。

北海道立近代美術館では日勝の作品十点のうち、これまでに八点が修復された。今年になってからは、近々道内のある美術館に貸し出す予定の〈牛〉（一九六六年）が修復されたばかりである。詳細は省くが、はがれ落ちそうな絵具を接着し直し、また板のゆがみを抑えるとともに酸性の空気が板の裏に直接触れないよう、厚いボードを裏からはめ込んだ。額もよりしっかりとしたものをつけ直した。と、言葉で書くと簡単だが、修復の現場では細かくて慎重な、神経を使う作業が延々続く。

こうして多くの人の手を経て、作品は旅立つていく。牛よ、みんなにかわいがつてもらうんだぞ！ 直したくても直せない仲間たちの分まで…。

『飯場の風景』の一筆箋
新発売!

感想ノートより一 ⑯

札幌市から友人と2人で来館しました。
内面で描いたような沈黙の絵を感じました。
二階にあった彼の部屋の中にピンで留めてあった新聞の切り抜きを見ました。梅原猛の「信仰不在の現代」罪の意識という文章です。
彼の内面に内在する生きていることの罪の意識
それが彼がキャンバスに描く物に対しての(人間を含めて)
優しさだと思いました。 3/28

札幌市 Y.U

約2年前に神田日勝の絵を初めて見て魅了され
いつか見に行きたいと思っていました。今回ここに来るために
友人と北海道旅行を計画し、やっと実現しました。
スゴク好きな画家の一人で、本物の絵を見て
涙が出てきました。
やっと会えたのに、日勝さんご本人がいらっしゃなくて
残念です。また来ます。 3/30

東京都 板橋区 S.N

馬(絶筆)を直にみたいと思いやってきました。
絵を見るのは好きで、これまで多くの絵をみてきましたが、
こんなにも胸に迫ってくる絵は初めてでした。
描き手の想いがそのまま見る者に伝わってきます。
これからは、絵の鑑賞の仕方が変わることになります。
描き手の想いに、心をはせてしまいます。 4/4

旭川市 N.H

59年目の誕生日を迎える
“未完の馬”とは3度目の出会い
“どう描くかは、どう生きるかだ”と日勝は云った
私にとって「どう生きるか」は、59年経っても解らないでいる
“未完の馬”から、生きる事への後押しをしてもらえるのは
自分が障害者だからではない
この絵を見ると、完成されない、未来がみえる 可能性を感じられる
だから、又、この“未完の馬”に逢いに来るだろう 7/28

T.S



『飯場の風景』
が一筆箋に仲間入りし、「馬絶筆」と「自画像」に加え、三種類になりました。

十月一日から
記念館の受付で販売中です。

記念館の学校活用



鹿追中学一年生の鑑賞授業が五月に行われました。生徒たちは展示室でワークシートを用いて熱心に作品に向き合い、その後気に入った作品を描き、印象や感想を発表するなど、意欲的に取り組んでいました。

六月には鹿追高校の三年生一名が三日間、就業体験として受付や監視業務を体験。

七月には鹿追中学校の総合学習「鹿追を探る」で一年生四名が記念館と神田日勝について調査しました。

アート・キッズ・クラブ

五月二十二日～二〇〇五年二月二十六日

鹿追町民ホール



夏休み子どもワークショップ 水に浮くおもちゃを作つて遊ぼう!

八月十日 鹿追町民ホール

発泡トレイや紙コップなどを活用して、水に浮くおもちゃを作りました。講師は金澤和彦氏。記念館の裏庭に設けた仮設ブースに完成したおもちゃを浮かべ、楽しく遊びました。参加者は幼稚園一名・小学生十四名。

ペットボトルや牛乳パックなど、ドリサイクルゴミの利用で、今年は万華鏡、ペットボトルロケット、そして風船に和紙を貼って作るランプシェードに挑戦。小学生対象ですが、母親も飛び入り参加し、楽しそうに製作する姿も見られました。

親子ワークショップ
ねんど・おもしろ・かたちといろ・つくろ
九月十八日・二十三日 鹿追町民ホール

親子で美術に親しむことを目的としたファミリー美術館事業として、紙粘土で好きな形を作り、アクリル絵の具で色を塗るワークショップを実施しました。講師は中島亜希子氏で、幼児と親十四名が参加。親子で協力する姿や子どもより熱心に取り組む親も見受けられました。